



1. ヘルスコミュニケーション学関連機構の活動報告

木内貴弘

ヘルスコミュニケーション学関連機構元理事長
東京大学大学院医学系研究科医療コミュニケーション学分野教授

ヘルスコミュニケーション学関連学会機構とその分科会の大きな組織改組や改革が2022年度末で一段落して、2023年度は少し落ち着くことができました。新たな分科会である日本歯科コミュニケーション学会と日本看護コミュニケーション学会は2022年度に設立されましたが、「ヘルスコミュニケーションウィーク 2023~福島~」では、準備の都合上、一般演題のみの発表となり、シンポジウムの開催は「ヘルスコミュニケーションウィーク 2024 in Yokohama」以降となります。このシーマニア第2号(2024年)には、日本歯科コミュニケーション学会会長の河口浩之先生と、日本看護コミュニケーション学会会長の阿部恵子先生からのご挨拶を掲載しています。2023年度の新たな活動内容としては、1) コミュニケーション誌「シーマニア」創刊、2) 役員改選方法の変更とこれに伴う定款、規則の改正、3) 日本ヘルスコミュニケーション学会誌奨励賞の創設が挙げられます。以下の順にこれらについて報告します。

1) コミュニケーション誌シーマニアの創刊

本機構も順調に会員数が増えており、また主催するヘルスコミュニケーションウィークの参加者や発表者も年度毎に最高を更新しています。また分科会も9つに増加し、会員の研究や関心の内容も多様化しています。これを期して、2023年度より、コミュニケーション誌シーマニア(Seemannia)を創刊し、本号(2024年号)が2号目となります。シーマニアは、南アメリカ原産の多年草で、赤や黄色の花を多く咲かせ、その花同士がお互いに盛んにおしゃべりしているようにみえます。このため、シーマニアの花言葉はコミュニケーションと繁栄とされています。本機構のコミュニケーション誌に相応しい名称だと考えています。しばらくは、年度に1回の発行を予定しています。

2) 役員改選方法の変更と、これに伴う定款、規則の改正

当機構はまだ設立して間もなく、会員数も増加を続けています。またコロナ禍の中、会員同士の交流がままならない状況が長く続きました。一方で、ヘルスコミュニケーション学は多様な切り口を持ちうる学問領域であるため、研究者の出身学部や専門領域も非常に多様です。これらのため、会員同士のお互いの認知がまだ十分ではありません。このことから、代議員の選挙については、あらかじめ代議員候補のリストを作成して、ほぼ信任投票に近い形で選挙を行うことを提案し、代議員会からの承認をいただきました。

2022~2023年度の代議員は、当機構に組織移行する前の旧日本ヘルスコミュニケーション学会(当機構の分科会の日本ヘルスコミュニケーション学会と異なります)の運営委員をされていた方がそのまま当機構の代議員となっていました。他の8つの分科会の運営委員は、旧日本ヘルスコミュニケーション学会の運営委員を兼任している人を除けば、当機構の代議員ではありませんでした。このため、各分科会の運営委員の先生方には、全員当機構の代議員の候補となっただくことで、代議員会の承認をいただきました。更に下記の要件を満たす方についても、代議員の候補となっただくことにしました。下記要件を満たす候補として、1名に推薦がありました。代議員選挙の結果、この候補も含め、すべての代議員候補の方が当選となりました。

1. 大学等の講師もしくはこれと同等以上の研究業績を持つこと
2. 2年以上の会員歴があること
3. 少なくとも3名の正会員の推薦があること

各分科会の運営委員については、定款上各分科会会員の選挙で決めることにはなっていましたが、代議員会の決議により、選出できることにしました。代議員のときの事情と同様に、各分科会でも会員同士の認知が十分でなく、選挙は難しいと考えました。また分科会運営委員会は歴史も浅く、また分科会によっては、運営委員の数を集めるのに苦労している状況もあります。このため、まだ既存の分科会運営委員に継続して、運営委員をやっただき、必要に応じて、新たな運営委員を追加する方針でいきたいと思えます。

また、役員改選方法とは直接関係はありませんが、役員の任期が年度の途中の代議員選挙の終了時までとなっていたものを、会計年度に合わせる改正も実施しました。

3) 日本ヘルスコミュニケーション学会誌奨励賞の創設

当機構の分科会の学会誌では、日本ヘルスコミュニケーション学会誌のみが、一般投稿による論文投稿を受けつけています。まだ論文の質量とも十分ではありませんが今後の発展が期待されています。当機構では、優秀論文賞と優秀書籍賞を設けておりますが、優秀論文賞は、日本ヘルスコミュニケーション学会誌の掲載論文による受賞は、ここしばらくは難しいと思われます。そこで、日本ヘルスコミュニケーション学会誌での論文投稿を促すため、同誌発表論文のうちで優秀な論文を表彰する日本ヘルスコミュニケーション学会誌奨励賞を創設することにしました。同奨励賞は、同誌掲載の原著論文、総説等で、一般投稿されたものを対象とし、同編集部からの依頼原稿は含まないものとしました。審査は、日本ヘルスコミュニケーション学会編集委員会が過去2年間で授賞に値する論文があれば当機構理事会に推薦（最大でも3本以内）し、最終的に利益相反のある理事を除いた理事会で決定することになっています。

最後に、私は日本ヘルスコミュニケーション学会で2年間、ヘルスコミュニケーション学関連学会機構で2年間、合計4年間理事長を務めさせていただきました。この期間には、旧学会・機構にとって、大きな変革の時期と重なりました。この間にいただいた、機構会員の皆様の多大なるご支援、ご協力に感謝いたします。